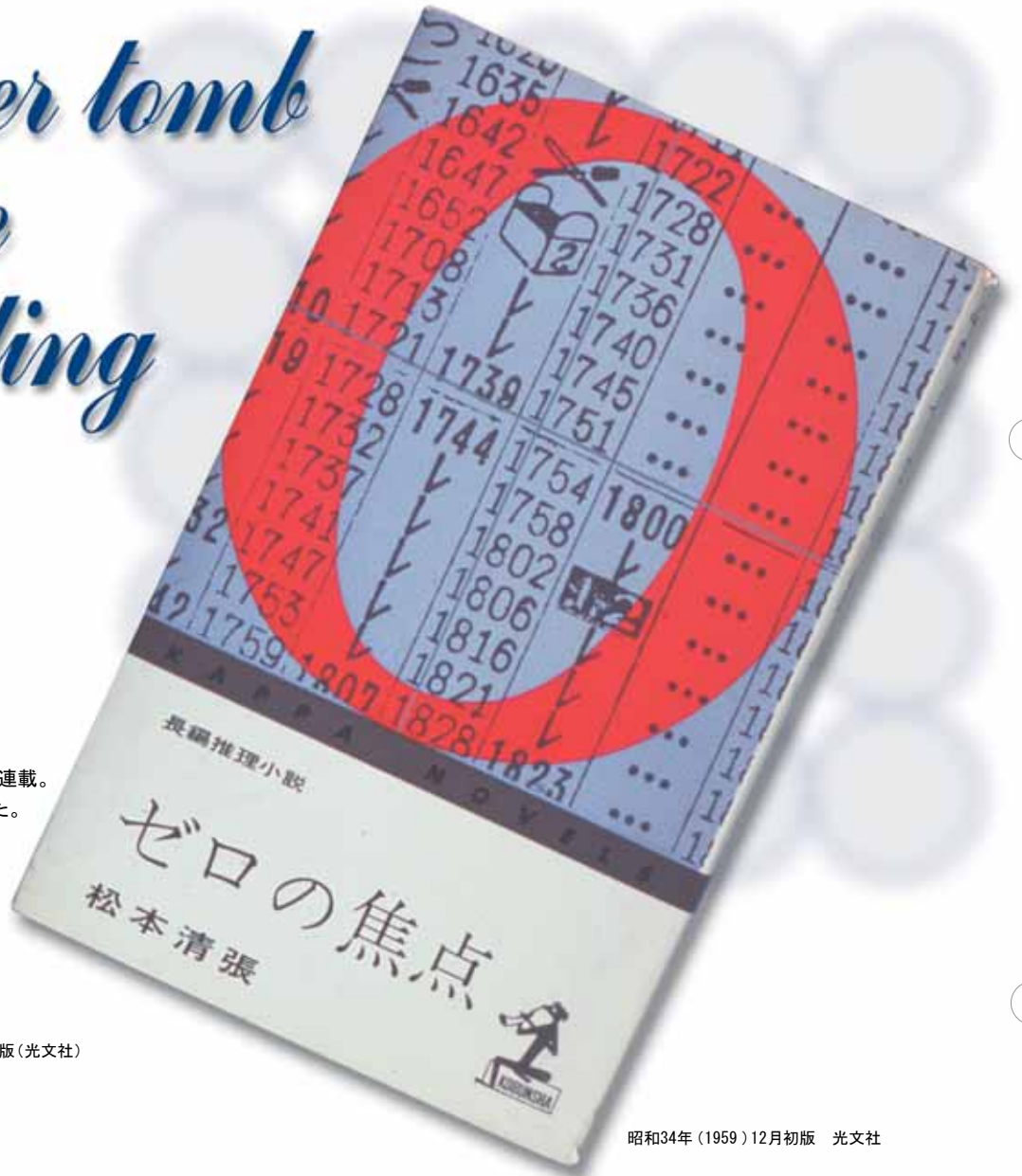


松本清張記念館

◆館報◆

2002. 11
第11号

*In her tomb
by the
sounding
sea!*



「零の焦点」は昭和33年3月から昭和35年1月まで雑誌『宝石』に連載。のち改題し「ゼロの焦点」となった。

現在入手できる本

- 『ゼロの焦点』新潮文庫(新潮社)
- 松本清張全集 第三巻(文藝春秋)
- 松本清張傑作総集・(新潮社)
- 松本清張セレクション 第三巻
- 『ゼロの焦点』カッパノベルズ復刻新版(光文社)

昭和34年(1959)12月初版 光文社

目次

● 特集 没後10年記念講演会	2
● 没後10年記念事業	4
● 第4回研究奨励事業贈呈式	4
● 展示品紹介	5
● 探検! 清張記念館	5
● みんなの広場	6
● 友の会活動報告	6
● 企画展紹介「松本清張の旅」	7
● 北九州文学マップ	7
● 没後10年記念テレビ番組	8
● トピックス	8

作品紹介

見合いで鶴原憲一と結婚した板根禎子は、わずか一週間の夫婦生活を送った後、夫が行方不明という事態に直面する。

なぜ憲一は消えたのか。夫婦になつて間もない禎子は、その手がかりとなる夫の日常すら知らないことに気付く。

金沢出張所に夫の後任として来た本多と失踪の謎を追ううちに、夫の秘密が闇の中から漠然と現れる。

東京と金沢との二重生活には、仕事以外の別の意味があったのだ。

解決の糸口が見えかけたその時、憲一の実兄に次いで本多が殺された。

夫の失踪から続く一連の死の意味…憑かれたように追求を続ける禎子は、夫婦にとって衝撃の事実を知ると同時に、もっと大きな秘密に突き当たる。

へいわば、これは、敗戦によって日本の女性が受けた被害が、十三年たった今日、少しも傷痕が消えず、ふと、ある衝撃をうけてふたたび、その古い疵から、いまわしい血が新しく噴きだしたとは言えないだろうか。(本文より)

結末を見届ける舞台は、能登金剛。断崖に押し寄せる日本海の荒波、禎子の胸にはポールの英詩がよみがえった。

(学芸担当 柳原 暎子)

記念講演会

松本清張の没後10年を記念して、北九州国際会議場メインホールで開催された記念講演の概要をお知らせします。

私が小説を書きはじめた頃、既に清張さんは大流行作家であり、また推理作家協会の理事長にもなっておられました。年代もかなり違い、直接の接触、交流は多くはありませんでした。私たちは親しみも込めて「清張さん」と呼んでおりましたが、実際、下の名前だけで通用する作家は限られています。「鷗外」「漱石」「藤村」などの文豪と推理小説の世界では「乱歩」と「清張」さんくらいです。今日は「清張文学の魅力」と題してお話しさせていただきますが、このように「ビッグな清張さんについて、多くの愛読者を前にして話すのは少し気がひける部分もありますが、自分なりに話してみたいと考えております。

清張さんは一般に社会派推理小説作家といわれてきましたが、本人は決してその呼び名に満足してはいたわけではありません。清張さんは、推理小説が本来的に持つ謎を解くおもしろさ、醍醐味を決して軽視してはいたわけがなく、むしろ社会派の面ばかりが強調されても困ると思っております。昭和四十一年、読売新聞出版局で松本清張監督のもと、戦前から戦後間近の本格派といわれるミステックな探偵小説に對抗する新本格シリーズを書きおろしてやろうという企画がありました。清張さんと読売との関係は「週刊読売」での「眼の壁」の連載にさかのぼります。清張さんにとってはじめての

週刊誌連載であり、義理堅い清張さんは、それに恩義を感じて監修を引き受けたと思えます。その新本格シリーズでは人間を書こうとし、犯罪者、被害者などに迫り、その背景、動機を探ろうとしました。新本格シリーズの作家のひとりとして私も参加させてもらったのですが、作品構想ができあがって清張さんにお会いしました。そのとき推理小説が本来的に持つ謎を解くおもしろさ、醍醐味を軽視してはならないと指摘されたのを覚えています。

作家には二つのタイプがあります。他人の意見など気にせず書くタイプの作家と、自分の書いたものについて常にどうかと気にかけているタイプの作家です。清張さんは後者の作家です。私が「近代ジャーナリスト列伝」を連載で書いていたころ、講演会で講師として清張さんにお会いしました。「近代ジャーナリスト列伝」のなかで、中江兆民が幸徳秋水に送った色紙に書かれた「文章は経国の大業にして不朽の盛事なり」が、これまでいわれてきた中江兆民の作ではなく、「三國志」のなかに出てくる曹操の子曹丕の「典論」の中の一節であることを紹介しました。清張さんも中江兆民について書いており、講演会の楽屋で「君はどこで調べたのかね」と聞かれました。そのときは「たまたま三國志関係の本を読んでいてわかりました」と答えましたが、非常に強い探求心を感じました。探求心の強さ、物事に対してとことん追求しようとする気持ちは単なる詮索好きとは違う。清張文学の魅力の底には、この探求心の強さがあると思えます。

作家というものは、その処女作にその作家のもつ資質、将来性がわかるといわれる。先程、松本清張記念館を拝見しましたが、清張さんには膨大な作品があります。しかし私はやは

り芥川賞受賞作「或る『小倉日記』伝」を読むことによって、清張文学の魅力がよくわかると思っております。

小説ではまず最初の部分に、熊本の国権党の話が出てきます。明治期の歴史を学んだ人にはよく知られた史実にちなんだ話で、引き込まれるように小説の中に入っていきます。そして物語は、実在の主人公田上耕作が、森鷗外の小倉時代の空白を傍証で埋めようと努力する不遇な話へと展開していきます。実際は、清張さんが取材し、想像した部分もふくまれていると思えますが、まるで実録のようにすすんでいきます。

また、最初の部分と最後に「ごんびんや」とその鈴の音が登場します。田上耕作はその死の床で母親に、聞「ごんびんや」は、その日のうちに手紙を届ける職業で、森鷗外が小倉地方独特のものとして紹介しています。清張さんは、「この地方独特のものを絶妙に作品の中に取り込んでいます。これは都合がいいから使うたのではなく、よみがえる過去の記憶を通じて最後に盛り上げていく手法として使っているような気がします。

清張文学の可能性を予言した点で、坂口安吾の芥川賞選評がよく知られていますが、実は瀧井孝作もまた芥川賞選評のなかで「青空に雪のふるけしき」と形容したいような、美しい文章に感心しました。（中略）この人は、探求追求というように一つの小説の方法を身につけているようだと分りました。」と述べています。清張作品は、単に推理小説だけでなく、時代小説、古代史、「昭和史発掘」を頂点とするノンフィクションにおよびますが、その根底には追求があり、しかも正確です。清張文学は、多くの作家にも影響を与えており、簡単に色褪せることはないとおもいます。



「清張文学の魅力」 三好徹氏

(みよし とおる)

- プロフィール
- ・昭和6年(1931) 東京生まれ。
- ・元読売新聞社記者。
- ・昭和42年「聖少女」で第58回直木賞を受賞。
- ・主な作品に、推理小説「光と影」、スバイ・スリラー「風塵地帯」、歴史小説「天馬の如く」、昭和史のノンフィクション「興亡と夢」などがある。

没後10



今日の講演タイトルは本当は「頼りになるが、ちょっと怖い遠縁のおじさん」にしかつたんです。遠くの親戚に当り、時々やってくるのですが、言うことが怖いときもあるという感じのおじさんです。

おじさんが松本清張さんだとすると、親父はほくらにとつては江戸川乱歩さん。小学校の頃から「少年探偵団シリーズ」を夢中になつて読み、また懸賞小説を書き始めた頃は選考委員をなさつていました。恰幅が良く、その前に出ると自然にふるえちゃうような怖さがありました。同時に新人を始終激励してもくたさつた。「怖いけれども、慈父」という感じです。ほくら世代には、初めの頃は乱歩さんに褒められたくて小説を書いたものです。

この江戸川乱歩さんも頼りにしていたのが松本清張さんでした。乱歩さんは一九六三年に日本推理作家協会を作られ、初代理事長もされましたが、次は清張さんにやつて頂く決めておられました。探偵小説界では乱歩さんのほかに老練な方が沢山いらっしゃいましたが、実際にいい小説を書かれ、出版界にも顔の利く清張さんが適任だと。この清張さんは頼れる人だ、という構図は、清張さんが死ぬまでずっと続きます。本格推理小説シリーズ（読売新聞社）の監修を引きうけてくれたり、出版社と編集者の争議の時や冤罪事件の再審請求キャ

ペーンの時に、若い作家の集まりに名前を貸してくれたりしています。

ほくが最初に読んだ清張さんの小説は、『週刊読売』に掲載された「共犯者」です。当時、ほくは読売新聞の札幌の北海道総局におりました。昔から探偵小説は好きだったんですが、新聞記者になつて感じたのは、小説は実際の事件とあまりにも違ひすぎるということ。もう少し現実的なものがあったらいいと思つてた矢先でした。松本清張という人が芥川賞を取つたことは知つていて、どうしてその人が探偵小説を書いたのかと思つて読んでみると、これまでのものとは違っている。新しい作家が出てきたんだなと感心しました。

翌年の一九五七年、清張さんは「共犯者」も収録されている『顔』という短編集で、日本探偵作家クラブ賞を取られている。この段階で清張さんは探偵小説作家ではなかったけれど、乱歩さんも非常に評価をされ、皆も受け入れている。ですが探偵小説界から出てきた人ではなく、江戸川一家でもないから、遠縁の人なんです。遠縁の人でもないぞというときにちょっと頼りになるのが松本清張さんです。

では、「頼りになるけど怖い人」の怖い人ということですが、清張さんは決してただ怖いだけではなく、スジを通すところはスジを通す人でした。先輩の小説家ととことんまで論争されたこともありました。これもスジを通された例です。小説家というのはいつか自分中心の人が多いですが、そういうのじゃない。乱歩さんのあと、清張さんは推理作家協会の理事長を三期六年間務め、さらに会長職をしてくださいました。ところが二年後、私が理事長になつたとき、大変に怒られたことがあります。

家に帰ったら速達が来ています。「この手紙を清張さんは「協会の外にはあまり出さない方がいい」とおっしゃっています。紹介します。もうお亡くなりになつてしまふし。（会場笑い）協会から執行部への協議事項の連絡が遅いことについてのお叱りの手紙でした。皆さん笑つてらっしゃるけど、ずっと頼りにしておりましたから、こういう手紙が来たら怖いですよ。早速、謝りに行きました。ただ、一見自分本位に怒つておられるのですが、スジを通して見ると、だからこれは怒られた方は何も言えない。スジを通すと云えば、清張さんが、手続き上のミスをされ、それについては協会にちゃんと謝られたこともありました。

あるとき、清張さんとハイヤーで一緒になつたことがあつたんです。せいかくだからと色々質問をすると非常に親切に答えてくださる。清張さんは書く専門で、なかなか人と会つたりしないんじゃないかと思つていたので、後輩がまじめに質問をすれば答えてくださる方だとわかりました。それで、『小説推理』の編集長に、清張さんとの対談を提案しました。テーマ毎に適当な人が一対一で色々お話を聞いて、そして清張作品を浮かび上がらせたら面白いんじゃないかと。そしてら編集長が乗り気になりました。清張さんも賛成してくださつて、「僕は原稿料はいらねえし、対談の相手の人に十分なお礼をしてくれよ」とおっしゃつたんだそうです。この対談を集めたのがここにある『発想の原点』

松本清張対談集』。いい企画だったんじゃないかと思ひます。本当に、対談したときの清張さんはうれしそうにいろんな事を教えてくれました。本当に仕事が好きだったんですね。最後まで鞭を入れればなしで走り続けた方だったんじゃないかと思ひます。



「清張さんの思い出」

佐野洋氏

(さの よう)

プロフィール
 ・昭和3年(1928) 東京生まれ。
 ・元読売新聞社記者。
 ・主な作品に、「一本の鉛」、「華麗なる醜聞」、「機き逃げ」、「小説三億円事件」などのほか、ノンフィクション「北の事件簿」などがある。
 ・現在、松本清張賞選考委員。

松本清張 没後 10年 記念事業

今年の八月四日で、松本清張が亡くなつて十年が過ぎました。同じ日、記念館は開館四周年を迎えました。

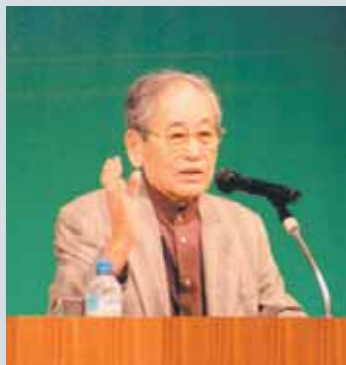
記念館では、開館四周年と没後十年を記念して、八月三日から三日間、記念館を無料開放しました。三日間の入館者は四千人を超えました。

また、没後十年を記念して、記念講演やドラマ紀行、映画祭、俳句大会など多彩な事業が展開されています。

映画祭は十月五日と十九日の二回行われました。

一回目は「霧の旗」「ゼロの焦点」の上映、二回目は「あるサラリーマンの証言」の堀川弘通監督の講演と映画「あるサラリーマンの証言」「ある遭難」の二本が上映されました。

ドラマ紀行では、九月二十二日から「ゼロの焦点」の舞台・能登金剛を訪問しました。



映画祭で講演する堀川監督

十一月八日からは、「砂の器」の舞台・島根県亀嵩を訪問しました。また、市内の主要書店で七月から八月にかけて清張作品ブックフェアが、映画館では八月から十月まで、「松本清張／映像の軌跡」と題して連続十一週にわたり、二十二本の清張原作映画が上映されました。



ドラマ紀行 能登金剛 清張歌碑の前で

第4回松本清張研究奨励事業 奨励金贈呈式

前号「第4回松本清張研究奨励事業・入選企画発表」でお知らせした入選者の佐藤芳子氏に、8月4日、末吉興一北九州市長から奨励金が贈呈されました。記念館地下企画展示室で行われた贈呈式には、平岡敏夫（筑波大学名誉教授）、半藤一利（作家）、山田有策（東京学芸大学教授）、藤井淑禎（立教大学教授）の選考委員各氏も出席され、平岡委員長から審査講評がありました。



審査講評を述べる平岡敏夫委員長

審査講評より

「『松本清張書誌情報の調査・整理及びデータベース化』は、10年近く松本清張の書誌情報を収集・整理してきた実績のある佐藤氏が、その上に立ってこれまでの仕事を押し進め、さらに多くの研究者がその情報を共有化できるよう、データベース化をもはかり、年来の仕事を完成させようとするものである。この件は、今後の松本清張研究の進展のためには不可避の研究企画として、委員会が高く評価された。（中略）松本清張研究奨励事業としてまことにふさわしい基礎的、根元的研究企画である。」



入選企画「松本清張書誌情報の調査・整理及びデータベース化」で、奨励金の贈呈を受ける佐藤芳子氏

年賀状



松本清張という作家は、多彩な仕事をした人物である。創作のジャンルもフィクションあり、ノンフィクションあり、内容は推理小説から歴史小説、現代史、古代史、評伝など幅広い。また社会的な発言で新聞などに取り上げられることもしばしばあった。

これほどまでに守備範囲の広い清張が、では多趣味だったかといえば、そうともいえない。高等小学校卒で働きに出て、四十代で作家となり新聞社を辞めてからは、ひたすら創作に没頭した。それまで趣味だった遺跡巡りや文学、民俗学などは、仕事に転化してしまった。逆に「手に職を」と始め、長年家計を助けた画の仕事が、趣味として生きてきたのである。

再現家屋の正面にケース展示されている清張直筆の画は、清張が親しい人達に贈ったものである。年賀状は安生（あんじょう）登喜子（とつきこ）宛てのもの。仕事に忙殺されそうなの日々の中で、彩色した手書きの年賀状を送られたのは、ごく限られた人だったようだ。

安生さんは「清張日記」にも登場するファン一号の女性。

安生とき子さん、芦屋（兵庫県）より出京。銀座の「レンガ屋」で夕食。娘同席。

安生とき子さんは、ファンレターの第一号なり。昭和三十三年ごろにして、短編を賞む。爾来、関西へ行く機に彼女の夫（関西電力系の会社役員）と共に会う。（中略）かなりインテリで、かなり芸事趣味のある「童女のような老女」という小説上のイメージとして考えられる。

（「清張日記」昭和五十六年三月四日の項より引用）
（「松本清張全集六十五」文藝春秋）

これほどまでに、初めて手紙をくれたファンを大切にしていたことは、案外知られていないかもしれない。心が通じた相手には、それがファンであれ、たとえば歳のはなれた人であれ、誠実に接するのが清張流である。

自筆の年賀状。仕事としてではなく一個人に宛てて描かれた画は、職人らしく洗練されたフランスのなかにあたたかい表情が宿っている。

（学芸担当 柳原 暁子）



きよしとハルコの探検！清張記念館

1F 常設展示室

“「松本清張全仕事」インタビュー映像”の巻

きよし こうしてあらためて解説を見ると、清張がいかにも幅広い題材に挑んでいたかがわかるね。あ、清張が何かしゃべってる。

ハルコ 「現代というのは、情報が多すぎて、ないのと同じ」かあ。その中から真実を見つけ出すためにはまず、【権威】や【先入観】を「疑ってかかる」と。



きよし 自分の足で、目で取材して、自分の努力で清張が自分の経験の中から導き出したひとつの真実…。この映像のセリフはここから出た清張の強烈な自負心なんだろうな。ここまでいえたら格好いいな一。



ハルコ 今日はえらくまじめじゃない！

きよし ふふん、僕のことを「いいかげんな人間」だという「先入観」にとらわれてもらっては困りますねえ。

ハルコ あなた、本当にきよし君？

きよし そこから疑わなくていいよ…。

短いインタビュー映像ながら、清張作品の根源を支えるそのコメントはまた、私たちに向けての清張からのメッセージのように聞こえます。清張を著作のジャンルによって解説する展示、松本清張全仕事は1F常設展示室右手にあります。

みんなの広場

- ・こんなにいい本を書いて、映画もだし、人々によるこびを与えているのですごいと思いました。(10代・福岡・男)
- ・母が昔買っていた全集の一部を読みましたが、どの作品も好きでした。これからもっとたくさんの作品を読みます。(10代・京都・女)
- ・「点と線」「ゼロの焦点」「砂の器」などが好きです。来年の卒業論文では松本清張さんのことについて書こうと思っています。(20代・東京・男)
- ・1Fは歴史が分かっておもしろい。ドラマとかのシーンがあったらおもしろいかも。原稿があるだけじゃなくて。(20代・福井・女)
- ・飽きのこない展示に時を忘れてしまいました。入った時はただの観光客、出る時は松本清張通になって去ります。(40代・千葉・女)
- ・「砂の器」を何度も読みました。10代(高校生)で読み、大学に入って読み、結婚前に読み、そして40代に主人と一緒に作品を語りながらまた読み…。同じ作品でも読み手の年齢・経験によって、随分思いが違うのに感動しています。(40代・山口・女)

- ・学校時代の友人が大の清張ファンのため連れてきました。大変喜んでくれました。(50代・山口・女)
- ・娘時代から先生の御本が好きでよく読ませていただきました。家族で久し振りに掃倉し、この展示を見ることができ嬉しかったです。(60代・住所不明・女)
- ・私の年齢の人達は何らかの先生の作品に興味をもって読んできた。身近に先生と接したことに喜びを感じた。(60代・兵庫・男)
- ・若かった時の社会での出来事が一層深く思い出された。(70代・京都・女)

このコーナーでは、アンケートなどで寄せられた意見をご紹介します。

今回は、特にテーマを決めずに、最近お寄せいただいた皆さんの「声」を自由掲載しました。

次回はこれまでのアンケート集計結果を一部ご紹介します。

※アンケートは館内にも置いてあります。

友の会 活動報告

●平成14年度年次総会(8月4日(日):出席者80名)

前会長小林安司氏ご逝去に伴い、冒頭に友の会理事の互選による新会長の選任が行われ、今村元市氏が新会長に選任されました。

その後、平成13年度事業および決算報告、平成14年度事業計画および予算案について審議を行い、いずれも承認を受けました。



●半藤一利氏講演会(8月4日(日):参加者96名)

年次総会に続いて、作家半藤一利氏に「清張さんと私」という演題で講演をお願いしました。半藤氏が文藝春秋編集者であった頃の取材に関するエピソードや作家としての信条、司馬遼太郎との対比(半藤氏の新著「清張さんと司馬さん」がNHK出版より刊行されました)などについてお話しいただき、その興味深い話を会員は熱心に聞き入っていました。参加者も多く大変好評でした。



●清張サロン(9月11日(水):参加者13名)

従来「読書会」として実施してきた事業ですが、より気軽に清張とその作品について語っていただくために、「清張サロン」と名を改めて実施しました。今回は第1回目で、取り上げた作品は「張込み」「鬼畜」「一年半待て」の3作品です。講義形式ではなく、個々の参加者が作品についての感想などを自由に語り合うことを基本に、終始打ち解けた雰囲気の中で進行しました。新しい試みであり若干の戸惑いがあったものの、参加者には概ね好評でした。

第2回は12月中旬に実施予定です。



■友の会事業

- ・講演会・シンポジウム等の開催
- ・読書会・文芸講座等の開催
- ・映画ビデオ等の上映会の開催
- ・会報の発行
- ・松本清張ゆかりの地、他都市の文学館見学事業の実施 など

■会員の特典

- ・常設展の招待券(年間4枚)進呈
- ・企画展(年2回)のご招待
- ・記念館主催事業のご案内
- ・記念館広報誌(館報)・企画展図録進呈
- ・友の会オリジナルグッズ(ペーパーウエイト)の進呈(加入年度のみ)
- ・喫茶「石の館」(記念館内)の飲食料金1割引

会員募集中!

ただいま友の会新規会員を募集中です。松本清張記念館友の会では清張ゆかりの地の見学や読書会・講演会等の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。

8月から翌年7月までを1会計年度とし、会費は年会費制で3000円となっております。

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093(582) 2761 松本清張記念館友の会事務局まで

- 平成15年1月18日（土）から[予定]
- 松本清張記念館 地下
企画展示室



平成14年度の後期企画展は題して「松本清張の旅」。数多くの作品と業績を残した松本清張の軌跡を〈旅〉という切り口で見えていきます。

■一足先に予定している内容の一部をご紹介します。

1 未知への憧れ

少年期からサラリーマン時代まで、作家になる以前の清張にとっての“旅”について紹介します。

2 清張作品で旅する

清張作品は日本中・世界中を舞台としています。亀嵩や能登金剛、青木ヶ原の樹海など、清張作品に登場し、一躍有名になった土地もあります。多くの読者が清張作品で見知らぬ土地への旅へと誘われました。

3 海外取材紀行

流行作家として多忙な生活を送る合間を縫って、清張は現地におもむき、できるかぎり自分で取材を行いました。その対象は国内のみならず、世界各地におよびました。いつでも「作家」でありつづけた清張の側面を紹介します。

4 行動する作家

清張は社会的意義を持つ活動でも業績を残しています。様々な〈壁〉を突き破り、スケールの大きさを世間を驚かせました。作家の旅は、原稿用紙の上だけではなく、書斎の外でも結実をみせました。

5 ころの旅

少年時代から旅に憧れを持ちつづけた清張の長年の夢は、日本中の自分の作品の舞台を上空から眺める、というものでした。晩年、中江利忠氏（当時朝日新聞社社長）の協力で実現したとき、セスナ機内で青年のように喜んだそうです。カメラのファインダーを覗く清張の胸中には、どんな思いが去来していたのでしょうか。



皿倉山からみた八幡の町

「八幡を去ってから、もうずいぶんの年月が経つ。日頃は出身学校のことなどは思い出さないが、原稿をこうして頼まれてみると、しみじみとなつかしい思いが湧く。それは無理もない。人生の最も多感な時期を、大蔵の谷で過したのだから。」
多岐川恭が母校・旧制八幡中学（現八幡高校）の『創立五十年史』（昭和四十七年発行）に寄せた「思いで」の二部である。
多岐川恭は、昭和三十三年「濡れた心」で第四回江戸川乱歩賞を、また翌昭和三十四年「落ちる」で第四十回直木賞を受賞した。
大正九年八幡市（現在・北九州市八幡東区）に生まれ、東京大学経済学部卒業後、一年間の銀行勤務を経て昭和二十三年毎日新聞西部本社に入社し、記者生活の傍

北九州文学マップ — 多岐川 恭



ら創作活動に励んだといわれている。
新聞記者として十年余り勤務した毎日新聞西部本社を退職し、上京したのは、直木賞を受賞した昭和三十四年である。松本清張が、朝日新聞西部本社に勤務しながら書いた「或る『小倉日記』伝」で芥川賞を受賞したのを機に上京した六年後である。（中野 吉明）



昭和46年まで使われた旧制八幡中学校舎

松本清張 没後 10年 記念事業

テレビ映像化

協力：北九州市立松本清張記念館

今年に入り、松本清張の没後10年を機に、改めて清張作品を世に問うドラマの制作、放送が数多くありました。ご紹介します。

「天城越え」「火の記憶」「最後の自画像」	NHK総合	1月2～4日
「恐妻侍の妻」	NHK総合	1月6日
「逃亡」 金曜時代劇(6回)	NHK総合	1月11日～2月6日
「一年半待て」 火曜サスペンス劇場	日本テレビ	1月15日
「張込み」 名作紀行	NHK BS	1月28日
「張込み」 土曜ワイド劇場	テレビ朝日	3月2日
「死んだ馬」 月曜ミステリー劇場	TBS	4月22日
「事故」 火曜サスペンス劇場	日本テレビ	7月9日
「家紋」 女と愛とミステリー	テレビ東京	8月21日
「黒の奔流」 土曜ワイド劇場	テレビ朝日	9月28日
「鬼畜」 火曜サスペンス劇場	日本テレビ	10月15日
「たづたづし」 女と愛とミステリー	テレビ東京	11月27日

※来年も「疑惑」などの放送が予定されています。



「点と線」愛蔵本・DVD発売

● 編集後記 ●

今年八月四日に開館四周年を迎えました。多くの方々にご来館いただき感謝しております。平成十一年三月の創刊号から連載してきました「北九州文学マップ」は今回で終了させていただきます。次号からの新シリーズを期待ください。

(中野 吉明)

清張の傑作が、風間 完画伯の原画によって、新たな生命をふきこまれました。

愛蔵本「点と線」には、風間氏の美しいカラー挿画がふんだんに盛り込まれています。

DVD には、当記念館でも放映されている、氏の原画・作画監修の動画ドラマ「点と線」に加え多くの資料などが特典として入っています。ぜひご鑑賞下さい。なお、風間完画伯は今年、第50回菊池寛賞を受賞されました。



「点と線」
没後10年記念版

- A4変型、本文232頁
- 文藝春秋刊
- 3,000円 (税抜)



- 動画ドラマ「点と線」(60分)
- 国鉄黄金期「点と線」のころ(48分)
- カラー、ステレオ
- 製作・発売元：株式会社 電通
- 販売元：株式会社 ポニーキャニオン
- 4,700円 (税抜)



イラスト：山藤 章二

編集・発行 松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
<http://www.kid.ne.jp/seicho>
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円) 小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス J R：小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
バス：小倉北警察署前/NHK前下車
車：北九州都市高速、大手町ランプより5分

